【特別寄稿】百歳を超えた今想うこと

阿知須共立病院
創立者・会長　三好　正之

はじめに

ご承知の通り、阿知須共立病院・三好正之会長は最近では、二〇〇八年九月に上梓された「戦場の聴診器（中田整一著、幻戯書房）」の取材及びフジテレビ放映取材、ＮＨＫラジオ出演、証言記録取材「兵士たちの戦争」（ＮＨＫ出版、二〇一一年）、そして、二〇一五年夏には、戦後七〇年企画で読売新聞を含む新聞社五社の取材を受けるなど、精力的に活動され、今なお、ニューギニア戦死者への想い、命の大切さを講演などで訴えられています。

この度、もうすぐ百一歳を迎えられる三好先生に今の心境などについてご寄稿いただきましたのでご紹介致します。

◇　◇　◇

私も何時の間にか百一歳を迎えようとしています。百年間色々なことがありましたが、あたかも昨日の出来事のように思い起こします。

今でも心の奥底に鮮明に残っていることは、戦争のことと共に、死にそうになった戦友のことです。今年六月十二日に靖国神社に御参りして遺族の人達と話し合う機会に恵まれたことは大変感謝しています。この機会は、「戦争神経症」についての取材を、とＮＨＫ（Ｅテレ、２チャンネル）から依頼されたお陰です。その取材の間、七十数年前のことが走馬燈のように甦りました。今年八月下旬にＮＨＫで放映されるとのことで、取材には多少緊張しましたが、戦友の姿が寂しく心に思い浮かびました。亡き戦友達の心が安らかにと祈るばかりでした。

今までも、そして、これからの人生も戦友の「御霊（みたま）」が安らかに、と涙とともにただただ祈念するばかりです。戦友のご遺族の方々と涙ぐんで話をしていた時は時間が経つのを忘れる一時でした。神からまるで「お前は良いことをしてきたので、生き残って人の為に思う存分盡す義務がある」と言われている様な気がして、毎日の生活のすべてを振り返っている今日この頃です。

戦闘では、軍医として、そして、兵士として何時も一番先頭に立っていましたので、ジャングルの中で、アメリカ兵と二メートル近くでバッタリ出くわすことになり、二～三秒間お互い睨み合った事が今でも忘れられません。孫がアメリカに居ますので、その敵兵と遭遇した場所（昭和十九年七月末）の事を調べようと思っていましたが、敵兵の名前も分からず、戦闘中は平時の時とは違って、名前を聞くこともできず残念に思っています。

「人間同士、戦争は絶対にやってはならない」と、この頃切に思っています。その為には、生きられる限り頑張って人の為に盡さなければならないと思っていますので、健康維持を目的に、毎日散歩は欠かさず、美食でなく玄米と野菜を食べるように心がけています。皆様もぜひご参考にされてください。

末筆ながら、読者の皆様の健康長寿を祈念致しますとともに、今回の寄稿に関しまして、山口市老人クラブ連合会の皆様の多大なるご配意に心より感謝申し上げます。